

# 浜田徳海の敦煌写経の蒐集とそのコレクションの性格

岩 本 篤 志

## はじめに

筆者はこれまで、日本国内の敦煌文献が所蔵されるに至った経緯やそれらの特徴について論じてきた。そのうちのひとつである浜田徳海の中国西域出土写経コレクションについては、国会図書館所蔵「敦煌等経文」や古書市に出品された敦煌写経の類に、浜田徳海旧蔵である旨が記されている例を頻見したことから関心を持ち、その全貌をあきらかにしようと、岩本〔二〇一五〕を執筆した。

中国西域出土写経の蒐集家といえば、関西の弁護士であった守屋孝蔵が著名で、その旧蔵品は現在、京都国立博物館に収蔵されている。一方、浜田徳海は大蔵省に勤務した税務を専門とする官僚で、中華民国国民政府（汪兆銘政権）の全国経済委員会顧問などを歴任した人物である。その蒐集品の一部は国会図書館に所蔵されてはいたものの、最近まで市場に出回っていたものもあった。岩本〔二〇一五〕では国会図書館所蔵品の分析によって、浜田コレクションには日本国内の敦煌写経の蒐集家が手放したのも含まれていたことをあきらかにした。

その後、二〇一六年八月に、北京で開催されたオークションに浜田徳海の旧蔵品の一部が出品されたことから、公開された旧蔵品や写真、目録類の分析によって、岩本〔二〇一八〕で、その形成過程と全貌を推測しなお

した。

そしてこの度、財団法人東洋文庫内陸アジア研究部門・中央アジア研究班は、浜田徳海の中国西域出土写経・古文書コレクションに関わる所蔵資料を公開することになった。また、筆者に対し、これまでの原稿をまとめて、その解説としよう打診してくれた。筆者は、かつて東洋文庫に任期付きで籍をおいたことがあったが、こうした資料の存在はまったく知らされておらず、その出現に驚いた<sup>1)</sup>。

新たに公開された浜田コレクションに関わる資料はかなりの分量があり、短時間で分析できるものでなかったが、筆者に連絡があった時点で、すでに同研究班の「敦煌吐魯番資料に見る多元的宗教社会研究グループ」が、拙稿も参照の上で分析をすすめており、あらためて確認すべき点はそう多くはなかった。またその検証により、筆者の推論もおおかた裏付けられることにもなった。浜田コレクションの目録には、浜田が生涯をかけた思いを見ることができただけでなく、中国西域出土文献の研究上においても重要な情報が含まれている。本目録の公刊はそのコレクションの存在にあらためてスポットライトをあてることになるう。

本稿では、筆者がこれまで論じてきた浜田徳海の中国西域出土写経コレクションの蒐集過程を整理し直すことで、その特徴を紹介することとした。なお前稿と重複する部分がある一方で、省略した箇所もある。

## 1 浜田徳海の写経コレクションの現状

まず、浜田徳海その人と、現時点で現物や鮮明な写真を見ることができ  
るコレクションの一部を紹介しておきたい。

浜田徳海（はまだのりみ…一八九九―一九五八）は、鹿児島県に生まれ、  
一九二四年に東京帝国大学法学部を卒業、同年大蔵省に入省した官僚であ  
る。山口税務署長などを務めた後、一九三三年に醸造試験所事務官と主税  
局事務官を兼務、一九三九年八月に興亜院事務嘱託となり、同年一二月か  
ら翌年五月まで支那派遣軍司令部付として陸軍顧問を務め、一九四一年一  
〇月に大臣官房会計課長、一九四一年一月には兼任銀行検査官、一九四  
二年一月に専売局理事（二）補専売局塩脳部長<sup>(3)</sup>、一九四五年には中  
華民国国民政府（汪兆銘政権）の全国経済委員会顧問にも就任した<sup>(3)</sup>。また、そ  
の著作として、『信託法の新研究』（大鐘閣、一九二七年）があるほか、大  
蔵省勤務時代の昭和十五年（一九四〇）以前の税制改正関係資料（一六三  
点）は、現在、「浜田徳海資料」として整理されている<sup>(3)</sup>。また、スタンフォ  
ード大学フーバー研究所文書館所蔵の日本近代史コレクション中に浜田徳海  
関係文書があり、一九三八―一九三九年の軍特務部・中支那派遣軍の極秘史料  
が多数含まれるとされる<sup>(5)</sup>。

この浜田旧蔵の中国西域出土写経コレクションに関係あるものとして、  
国立国会図書館が所蔵する「敦煌等経文」が知られており、四〇件余の写  
経などを含んでいる。一方、それとは別に浜田旧蔵品とわかる形で、東京  
本郷の井上書店を販売元として古書市などに長らく出品されていたものも  
複数あった。また二〇一六年八月には北京で伍倫国際拍売会社が主催する  
浜田徳海旧蔵の西域出土文書のオークションが開催され、三〇件余が出品

された。その際には精彩な写真と解説を付した図録が刊行された。

ここではこのうち鮮明な写真が得られる国会図書館蔵「敦煌等経文」と  
北京で伍倫国際拍売会社がオークションに出品した一群についてまず紹介  
しておく。

（a）国立国会図書館蔵「敦煌等経文」（請求記号WB三二―一四八、国会  
本と略称）

国立国会図書館が所蔵する中国西域出土文献の中心をなすのが「敦煌等  
経文」で、四八件を含む。その先行研究としては、施萍婷（一九九五）、柴  
新江（一九九六）がある。とくに施（一九九五）の記録は詳細で、含まれ  
る四八件のうち、いずれが敦煌文献で、そうでない五代以降のものや日本  
写経がどれかを弁別している点でも重要である。ただ施（一九九五）は、  
敦煌文献とあきらかにそうでないものをひとくくりにして「等」をつけて  
まで「敦煌等経文」と題していることをいぶかしげに記すものの、由来に  
はふれない。この点は柴（一九九六）も同様である。

国立国会図書館の漢籍の受け入れ過程を記した土屋（一九九二）によれ  
ば、「浜田徳海旧蔵敦煌文書計四七点」が購入されたのは昭和三十七年（一九  
六二）から三八年にかけてであったという<sup>(6)</sup>。

また浜田徳海旧蔵の写経群の購入については、昭和三十五年十二月三日  
の衆議院会議における国会図書館の予算概算要求に関する質問と答弁から、  
さらに詳細な経緯を知ることができる<sup>(7)</sup>。

○岡部国立国会図書館副館長 それでは、昭和三十六年度（一九六一）  
予算概算要求の概要について御説明申し上げます。（略）

重点項目の第二は、本格的な図書館奉仕に必要な経費であります。そ

のおもなものは、図書購入費六千六百九十三万円であります。従来は、何分書庫の狭隘によって、蔵書の十分な充実を見ることができず、今日に至ったのでありますが、特に外国図書の弱体が痛感されますので、三十六年度からは、わが国唯一の国立図書館として外国の一流中央図書館に比肩し得る蔵書構成を持ちたいと考えております。なお、このうちには、国会からの要望に基づき、近來急速にクローズアップされました中近東、アフリカ関係の資料を整備する経費としまして一千四百万円、また、浜田徳海氏旧蔵の敦煌文書の購入費一千万円が含まれております。

○大野（市）小委員 十ページの「敦煌文書」というのはどんなものですか。

○岡部国立国会図書館副館長 最古の仏教の原典でございます。敦煌の石窟からスタインが発掘した敦煌文書というものは、今存在する仏典としては最高の権威のもので、これはロンドンのブリティッシュ・ミュージアムの図書館とか、フランスの図書館に入っております。もちろん北京の図書館にもございますが、それを、浜田徳海さんという方が中国に長く大蔵省の役人として在勤しておられた関係で数十点お持ちで、そのままなくなられた。これをそのままにしておきますと、海外に流出するおそれがありますので、これを国会図書館として収蔵することが、日本の仏教その他東洋学研究のために欠くべからざる資料ではないかということを専門家がサゼストしてくれますので、全部ですと相当巨額になりますので一度には買えないと思いますが、約半分くらいの分量の予算を計上いたしました。

以上のように国会図書館副館長、岡部史郎は「浜田徳海さんという方が

中国に長く大蔵省の役人として在勤しておられた関係で数十点お持ちで、そのままなくなられた」と答弁しており、浜田徳海が中国に滞在していた時期にそれらを手入したと認識されていたことがわかる。前述の土屋（一九九一）とあわせると、この翌年度から二年にわけて購入され、「敦煌等経文」と便宜的に名づけられたことになる。

国会図書館は二〇一二年に、この「敦煌等経文」に含まれる大部分を「国立国会図書館デジタルコレクション」の一部としてネット上に公開した。<sup>(8)</sup> 岩本（二〇一五）は、この写真データに基づいてその由来を論じたものでもあった。

続いて二〇一六年到北京伍倫国際拍賣会社がオークションに出品した浜田旧蔵本について一瞥しておこう。

（b）北京伍倫国際拍賣公司本（伍倫本と略称）

二〇一六年八月一九日、中国のオークション会社である北京伍倫拍賣有限公司が三〇余件の南北朝・唐代の写経を競売するとの報道があり、二〇一六年八月三〇日から九月一〇日まで首都図書館で展示会が開催された。<sup>(9)</sup> それらは二〇一六年九月二日から九月二十四日には北京の湖南大廈（ホテル）で展示され、翌二五日には、同ホテルでおこなわれた伍倫二〇一六秋季文物芸術品拍売会で展示品はオークションにかけられた。

この競売にあわせて、敦煌仏教文献の研究者として著名な方広鎔を編著者とする『浜田徳海蒐蔵敦煌遺書』が刊行された。この図録、すなわち方（二〇一六）は、全三六件をカラー写真によって紹介し、方広鎔による序文と司馬立心による解説、そして『国家図書館蔵敦煌遺書』と同様の、個々の資料の諸元を示した条記目録を含んでいる。

なお、これらは、方〔二〇一六〕の条記目録に言及されているように、そのほとんどが「浜田徳海蒐集中国古代写経・写本・文書コレクションの内」の題箋がつけられた木箱に収められている。つまり国立国会図書館所蔵「敦煌等経文」と同じく、浜田徳海のコレクションに由来する。

以上見てきた二つをあわせると、浜田旧蔵本については、八四件（四八＋三六）の存在が広く知られていることになる。また、一九五八年に浜田が亡くなり、一九六二年に国会図書館がそのコレクションの一部を購入したが、その後、近年に至るまで古書市などで浜田旧蔵の敦煌写経が出回っていたこと、そして、二〇一六年には三六件の浜田旧蔵とされる写経類が中国のオークションにかけられたことがわかる。

岩本〔二〇一八〕は、日本の古書市と二〇一六年の北京での出品物の関係、そしてその他の日本所在の敦煌文献の由来とこうした流れとをあわせて考察し、浜田のコレクションの形成と散逸の過程を推論したものであった。また、日本の古書市と北京のオークションの出品物などの一致から東京本郷の井上書店が関わっていることに言及した。

このたび公開された目録類は、こうした筆者の考察を裏付けると同時に、コレクション本来の全体像をあきらかにしたものである。日本における中国西域出土文献の収蔵と研究において、その目録公開の意義はきわめて大きいといえる。

## 2 浜田徳海とその写経コレクションの形成過程

では、財務行政のエキスパートとして活躍した浜田が、中国西域出土の敦煌写経を二〇〇件近くも蒐集できたことにはどのような背景があったのか。これについて新たに公表された資料も参考にしつつ、既に論じたこと

を整理しておきたい。

まず、前掲した衆議院小委員会の会議録によれば、浜田は日中戦争の時期、中国に長く大蔵省の役人としていた関係で敦煌文献を数十点所有していたが、昭和三年（一九五八）に亡くなった。そこで国会図書館は専門家の示唆をうけ、全部を一度には購入できないので、半分くらいを購入したということであった。

このことについては、戦前戦後、多数の稀覯本を取引した古籍商の反町茂雄の編んだ対談集に注目すべきくだりがある。その反町（一九八七）には、井上書店の店主、井上周一郎と反町による対談のうち「敦煌古写経の大口」「十年契約を三年で破約」と見出しが付けられた箇所に、以下のような内容が記される。

・井上書店は昭和二八年（おそらく三八年の誤記か誤植）に浜田徳海の遺族から敦煌の古写経などを購入した。

・コレクションは二〇〇点ほどあり、まとめて購入してくれる図書館・蔵書家を探してくれるよう依頼されたが、容易に引受先がみつからなかった。

・浜田は、日本の軍部が中国の華北方面に進出していた時代に、公の機関のそれなりの地位で北京に駐在しており、その際に敦煌から出た古写経類を集め、敗戦前に東京に戻った。

・敗戦後の混乱期、昭和二二年から二五、六年に、反町をはじめとした古書肆は多くの敦煌写経を扱い、浜田はそれらを購入していた。

・国会図書館がコレクション購入に名乗りを上げたが、一度に支払いがでないので一〇年の分割購入となった。しかし国会図書館は三年ほどで購入をやめた。



・京都大学の藤枝晃が国会図書館の相談にのり、優先して購入すべき三年分を選んだらしい。

・重要文化財の指定を受けていたものなどは国会図書館への最初の譲渡分には敢えて含めないようにしてあり、国会図書館の未購入分は井上書店が遺族から分割払いで購入した。

以上の内容は、先述した「昭和三五（一九六〇）年二月一日三日の衆議院における国会図書館副館長の予算概算請求」とほぼ一致するだけでなく、浜田のコレクションの形成と散佚の過程を知るうえで極めて重要な証言といえる。<sup>(10)</sup>

また、浜田のコレクションの形成過程を知るうえで、もうひとつ重要な資料がある。『第三十回東京大蔵会展観目録』（東京大蔵会（一九四四））である。大蔵会は「大蔵の翻訳、将来、攻究、彫造等に関し、功労ありし人の遺徳を讃仰し、その精神の普及を図る」目的で、東京、京都、名古屋など各地でそれぞれにおこなわれた。東京の大蔵会では『大正新脩大蔵経』編纂の参考資料の紹介や編纂状況が報告されるなどした。この行事は戦時中の昭和一九年には第三〇回（東京、東洋文庫）を数え、その際、浜田徳海は蒐集品を大蔵会の展示に供した。その際に作成された目録には彼の所蔵品のうち、展示品二八件、展示外品一六件の計四四件の題名、特徴などが掲載されている。

この中には現物または鮮明な写真を確認可能な「敦煌等経文」四八件や伍倫本三六件のうちに同一品とみなせるものがあるが、「敦煌等経文」四八件や伍倫本三六件は、第三〇回東京大蔵会の浜田氏の展示品（目録化されている出品外の品も含む）すべてを包摂していない。このことは浜田所蔵品がこの八四件（四八＋三六）よりも多く存在することを示唆している。

また、これによって浜田の中国西域出土写経の蒐集は、一九四四年以前にはじまっていたことが確実といえる。

さらにこのことについて国会本および伍倫本で、手がかりになりそうなのは、「一馬題」とある書誌学者川瀬一馬による箱書きである。川瀬一馬（一九〇六～一九九九）は、東京文理科大学卒業後、安田文庫、大東急記念文庫、阪本龍門文庫などで書籍蒐集に携わった書誌学者である。<sup>(11)</sup>以上の八四件（四八＋三六）中七件に、川瀬の箱書きがあり、「93」（「内の数字は「V 諸目録対照表」の整理番号）と無紀年の「47」をのぞいた五件〔70〕〔91〕〔98〕〔144〕〔169〕はいずれも「昭和癸未冬日」（一九四三）の紀年があつて、同時期に同じ依頼者が書かせた可能性が高い。「93」には「昭和庚申（辰）」（一九四〇）年の紀年があるが、東京大蔵会（一九四四）によれば、昭和一九年（一九四四）の『第三十回東京大蔵会展観目録』時には栗原氏の所蔵品であつたので、その箱書きは栗原氏かそれ以前の所有者が川瀬に依頼したとみることができる。一方、「昭和癸未（一九四三）冬日」の箱書きがある五件は、日本人が旧蔵していたことを明示する証左はない。しかし、反町と井上書店店主の対話に述べられていたように、浜田が日本の市場で敦煌写経を拾い集めたのが昭和二年（一九四七）以降であるとすれば、浜田は別の手段で、一九四三年にはすでに多数の中国西域文献を所蔵していたとみるのが妥当であろう。そして、一部について川瀬に箱書きを依頼した可能性を考えうる。また昭和四年（一九二九）刊行『昭和法宝目録』所収の「日本人諸家所蔵敦煌写経目録」、「日本未詳所蔵者敦煌写経目録」（以上は『敦煌遺書総目索引』、商務印書館、一九六二年に転載）に掲載された敦煌文献と、浜田旧蔵「国会本」「伍倫本」とに題名が一致するものが必ずしも多くないことも、浜田が一九四三年以前に中国の旧

蔵者が業者から直接、これらを買集めた可能性を裏付けられると思われる。

前掲のように浜田は一九三九年八月には興亜院事務嘱託となっており、一九四一年一〇月に大臣官房会計課長となっているので、この二年のうちのかなりの期間が北京に滞在、あるいは両国間を往来して敦煌の古写経類の一部を収集することになった可能性が高い。

では、一九三九～四一年頃の北京では敦煌文献または敦煌写経はどのように流通していたのであろうか。またその特徴を浜田蒐集品に見いだすことができるのだろうか。

まず、浜田旧蔵「国会本」「伍倫本」八四件中に、李盛鐸旧蔵品または李氏一族の蔵書印が捺されているものが五件存在することに注目したい。

李盛鐸（一八五九～一九三七）<sup>12</sup>は、字は椒微、号は木齋である。敦煌文献や善本を多数所蔵していたことで知られた清朝・民国期の官僚で、駐日公使を務めたこともある。その旧蔵品とされるものは国内外に広く散在している。岩本〔二〇一三A〕〔二〇一三B〕にも言及したように、その子、李滂が蒐集品のうちの優品四三二件を羽田亨に譲渡したものが、杏雨書屋の敦煌秘笈コレクションの中核となっている。彼またはその一族の印記がある資料の本書の整理番号と印記を併記すれば、次のとおりである。

〔19〕「徳化李氏凡將閣珍藏」

〔30〕「木齋審定」

〔32〕「合肥張氏閣家供養經」・「木齋審定」

〔84〕「徳化李氏木齋閣家供養經」

〔11〕「木齋審定」

〔32〕は冒頭に仏画があり、そのほかはいずれも紀年があるという点で、いずれも写経としては顕著な特徴を有する。〔32〕については岩本〔二〇一

五〕にも記したとおり、押縫印のように用いられた蔵書印は違和感がある。

〔19〕〔30〕〔32〕はそれら紀年・題記のいずれにも疑義があり、〔84〕の「徳化李氏木齋閣家供養經」の蔵書印も李盛鐸の生時の印とは考えられない<sup>13</sup>。

いずれも真贋に直結する証拠とはいえないが、蔵印を捺した時期をふくめ、高価に売買するためになんらかの細工がなされた可能性を払拭できない。藤枝（一九八五）が論じたように、李氏の蔵印は彼の没後、濫用された可能性さえある。ただし、印の真贋で資料自体の価値を判断することは適切ではなからう。

李盛鐸が多数の敦煌文献を所蔵していたことは、当時からよく知られており、早くから羽田亨が接触していた。そして高田〔二〇〇七〕に述べられるように、李盛鐸隠居後の一九三六年に息子の李滂は、旧蔵敦煌文献四三二件を羽田亨に譲渡した。そしてそれら四三二件全てが羽田の手を経て、杏雨書屋に所蔵され現在に至ることが判明している。

ところが当時、北京に在住していた文筆家、安藤徳器は「敦煌経卷蒐集記」（安藤（一九三九））なる一文を載せており、記事によれば「二月一九日の旧正月の直前」すなわち一九三九年初頭に李盛鐸旧蔵敦煌文献売却の情報を聞きつけ、購入を画策した顛末を記している。安藤は、北京で顔の広い作野秀一が李家から預かってきたという五〇点ほどの敦煌文献をみせられて興奮し、作野とともに金策に奔走したが、全部で五〇〇点近いと聞いていた李盛鐸所蔵敦煌文献は、銀行家の王克敏に先に購入されてしまったという。そしてその文末に、自身が閲覧を得た敦煌文献の題名を記している。そこに記された四七件のうちにある「金録晨夜十方懺」、「釋門教授」、「仏説解百生怨家經」、「達磨禪師論」などは敦煌文献の資料名としては希有で、注目される。

「金録晨夜十方懺」は「正統道藏」未載の道教の經典名である。これと同じ名の国会本〔115〕・WB三二―三三〕を調査した神塚〔二〇一三〕によれば、「金録晨夜十方懺」はイギリスに一件、フランスに一件、国会本は英国本（S三〇七一）と同一写本の一部（接続はしない）であるという。英仏の所蔵品はスタイン・ペリオの将来品であるから、安藤がそれを一九三〇年代の北京でみることはありえないし、〔115〕すなわちWB三二―三三の国会本が題名を有する唯一の部分なのである。道藏未収の佚書の書名が知られていたとは考えにくい。

つまり安藤が目撃したものは、王克敏のもとに入った後に、浜田を経て、最終的に国会本となった可能性が高い。そのようにみていくと、安藤が見たという敦煌文献の名前は浜田の中国西域出土写経蒐集に関わる重要な手がかりにみえてくる。

また国会本+伍倫本の八四件の範囲からはずれるが、上掲の「釋門教授」は、井上書店の販売カタログである井上書店〔一九九五〕に載せられた「子年三月五日計料海濟受戒衣鉢具色目一々如後文書 唐時代写 傳敦煌出土 麻紙 紙背「釋門教授」（見出しママ）のことであろう。カタログには白黒ながらそれなりの大きさの写真も付けられており、吐蕃期の敦煌の寺院の資料とみられる。安藤は、この紙背の「釋門教授」を資料名としたように思われる。

また「仏説解百生怨家經」は、井上書店の二〇一〇年のカタログ・ABAJ〔二〇一〇〕に掲載された「解百生怨家陀羅尼經」（浜田徳海蒐集・整理番号七七）とみられる。この「七七」は本書で公開された「II 濱田コレクション目録」と同じ番号、つまり「77」にあたる。なお「仏説解百生怨家陀羅尼經」は二〇一七年六月に行われた北京保利十二週年春季拍卖会に出

品・落札されており、その際に公表された写真と井上書店の二〇一〇年のWeb版カタログの写真に比べると、同一品とみてよい。なお、この三件以外の敦煌写経については、よく見られる写経名であって、同一資料か否かを確認するのは容易ではないが、安藤が目にした何件かが浜田の手に渡ったとみられる。

さらに他にも日本所在の「敦煌文献」の題名と比定可能なものがある。例えば「達磨禪師論」である。該当するものは関口〔一九五七〕で取り上げられ、有名になった薬師寺所蔵敦煌文献とされる「達磨禪師論」であろう。もちろんどのような経路で所蔵に至ったかは不明だが、王克敏の入手品に由来する可能性がある。

ここで王克敏（一八七三―一九四五）について、橋川時雄（一九四〇）、徐友春（二〇〇七）などの辞典類を参照しておこう。王克敏の字は叔魯、中華民国の政治家、銀行家、外交官である。一九〇一年（光緒二十七年）、清朝から日本に派遣され、一九二三年（民国二年）、フランス外遊後に中法実業銀行董事に就任した。そして一九一七年七月には中国銀行總裁となるも一九一八年に辞任し、一九二〇年以降には中法実業銀行總裁、天津保商銀行総理、中国銀行總裁などを歴任し、一九三二年には冀察政務委員会の委員となった。日中戦争勃発後の一九三七年に親日政權樹立作業に着手し、一二月には中華民国臨時政府が成立する。そして一九三九年六月、王克敏は汪兆銘と合流の交渉をはじめ、翌一九四〇年（民国二十九年）三月に南京国民政府が成立した。しかし、日本の敗戦により、王克敏は一九四五年一月に漢奸として逮捕され獄中死した。

このように主に財政畑をわたってきた経歴や日本寄りの政權樹立をこころみた王克敏と、税と財政の専門家として北京や中華民国国民政府に派遣

された浜田との間になんらかの交流があった可能性は高い。

以上をまとめると、李盛鐸が旧蔵した主要な敦煌文献四三二件が羽田亨に譲られたあとに、その「遺族」たちは五〇〇件にもなる「李盛鐸旧蔵敦煌文献」を売却しようと画策し、その相当数が王克敏の手に渡った。そしてその一部が直接か間接かは不明なものの、浜田が入手した。安藤が見た「李盛鐸旧蔵敦煌文献」は、その後に市場に出現した李氏蔵印が捺されたものとの関係を考え得る。そしてこれら（またはこれに類する品）は中国国内だけでなく、少なからず蒐集家がいた日本にも相当数、流入したと推測される。

### 3 コレクションの特徴

#### ——蔵書印・箱書き・目録から見た

前章では、川瀬一馬による箱書きと李盛鐸の印記に注目して、コレクションの形成過程を考察した。次にその他の印記と揮毫（跋文等）および諸目録での掲載という三件から蒐集品の来歴とコレクションの形成過程を確認してみたい。それが付された資料の請求記号（国会本は請求記号も）を併記して次に羅列する。

#### （一）印記・揮毫

・「顧二郎」〔36〕…伍倫09、〔92〕…WB三三一九、印記

余〔二〇一二〕は、首都博物館蔵敦煌吐魯番文献に複数件みつかる「顧二郎」印を検討し、顧鼈のものと推測した。ただし顧鼈が何故「二郎」と称しているかは不明である。ここではとりあえず余〔二〇一二〕、林・陳〔二〇〇七〕に依拠して、顧鼈のプロフィールを紹介しておく。

顧鼈、字は巨六、一八七九年生まれ、四川広安の人。一九〇五年に日本に留学、法政大学を卒業した。袁世凱を支持し、総統府顧問など要職を歴任し、袁世凱の没後、指名手配をうけるが、一九一八年に特赦され、その後政界を引退、上海を拠点に骨董業で生計をたてた。没年は不詳である。この経歴からみると、印が捺されたものが流通したのは一九一八年以後になると推測される。

・「合肥張氏閣家供養經」〔32〕…WB三三一六、印記

張広建（一八六七―一九三八）の印記。敦煌文献の旧蔵者として著名で、岩本〔二〇一三A〕で言及した。同印は、〔32〕の国会図書館蔵本以外に、杏雨書屋敦煌秘笈に一件、天津芸術博物館所蔵品に二件、また、守屋一九八（京博蔵品）に一件、確認できる。また三井文庫の所蔵品の多くに張広建旧蔵品があり、「勛伯」もしくは「張廣建印」「張勛錫藏」などの蔵印が見られる。ただ、「木齋審定」と「合肥張氏閣家供養經」があわせて一文獻に捺されている例を他にみない点や、〔32〕のように所蔵印が料紙の継ぎ目に割り印のように捺されているのは不自然におもわれる。

・「孫道毅」〔35〕…WB三三一七、署名

孫揆均（一八六六―一九四二）による署名。国会本WB三三一七の巻頭に料紙を足して「唐人写本大般涅槃經」（横書）、「屬題 孫道毅」（縦書）と瘦金体で題書がなされる。題書には右上に遊印が一顆ある。孫揆均は叔舫または道毅とも名乗り、寒涯と号した。国民政府大学院総務庁長等を歴任した。孫揆均は廉泉（一八六八―一九三二）のいとこで、廉泉の妻、呉芝瑛とも交流があった。杏雨書屋・敦煌秘笈の羽四七七に「寒涯」による題書があり、同一の書体と認められる。孫揆均が揮毫したWB三三一七も廉泉旧蔵品であったか、廉泉と近い孫揆均旧蔵品であったとみられる。



敦煌秘笈の康泉旧蔵品は一九三八年一二月に某氏から羽田に譲渡されており、これ以前に大陸のみならず日本国内に流通があったとみることができ。敦煌秘笈の康泉旧蔵品については岩本〔二〇一三A〕に詳述した。なお、後述のように「35」は昭和一九年時点では山合喜三郎氏が所蔵していた。したがってWB三三一一七から、康泉―山合―浜田―国会図、という所蔵歴の変遷を見いだすことができる。

・「朗庵秘笈」「林氏家蔵」「朗庵秘玩」〔94〕…WB三二一六、印記  
「宝宋室主人」〔163〕…WB三三一一三〇、箱書き

林熊光（一八九八―一九七二）の印記および箱書きである。林熊光の字は朗庵。室号「宝宋室」。学習院卒業後、東京大学に学び、後に台湾総督府評議会評議員を歴任した。

施（一九九五）が述べているように、WB三二一六には林熊光が「乙丑春正月」（一九二五年）に東京で得たことなどを記した跋文が付されている。また神塚（二〇一三）が言及するように、WB三三一一三〇には箱書がある。そこには、北京の商人がこれは『修文殿御覽』残巻だといったが、神田喜一郎（一八九七―一九八四）に尋ねたところ、道教の叢書の一つで、すでに佚書となった貴重なものとの助言があったと記されている。その末尾には「癸酉夏日」（一九三三年）の紀年がある。類するものとして、天理図書館が所蔵する敦煌本（莫高窟外で発見）『般若心経』に一九五二年と一九五三年に書かれた林熊光の跋文があり、やはり神田喜一郎に意見を求めていることが記されると、栄（一九九六）が指摘する。

これらをあわせてみると、林熊光と神田喜一郎の間に二五年近い長い交流があったこと、林熊光が三件以上の中国西域出土文献を所蔵していたことがうかがえる。また林熊光がそれらを手放したのは一九五三年より

後であった可能性が高い。

・「晉卿」「新城王氏」〔162〕…WB三三一一二九

ともに王樹枏（一八五一―一九三六）の印記。字は晋卿、陶廬老人または陶廬主人などの号を持つ。この人物については栄（一九九六・一七五―一八一）等に言及があるほか、杏雨書屋所蔵品敦煌本の印記を論じた岩本〔二〇一三A〕でも整理したので詳細は省略する。中国国家図書館、上海図書館蔵品のほか、とくに台東区書道博物館蔵品に旧蔵品が多い。中村不折は大正十一年（一九二二）、文求堂の田中慶太郎をとおして、王樹枏の旧蔵卷子三〇巻、冊子本八帖を購入したとされる。<sup>16</sup> WB三三一一二九は、六八件 of 中国西域出土の仏典断片を一冊に貼ったもので、とくに冒頭の数片は敦煌文献ではなく、料紙や字姿から吐魯番文献とみられる。

・「欽許菴父游隴所得」〔26〕…伍倫 08

中国西域文献の旧蔵者としてよく知られた許承堯（一八七四―一九六四）の蔵印である。「II 濱田コレクション目録」によると、「27」にも同じ朱印が捺されている。許の中国西域文献の収集については、余（二〇一二）に詳しい。

・「隋經室主 壽石齋秘蔵印三佛庵主 士聰 師壽石齋説目怡情之品」〔12〕…伍倫 02、「14」…伍倫 35

旧蔵者は、楊士聰（一八七〇?）とみられる。徐（二〇〇七）によれば、字は芟青、安徽泗県出身で湖南財政監理官、山西塩政使を歴任し、一九一三年―二二年には衆議院議員となっている。

・「曾歸鴻寶、寒梧山莊、徐鴻寶審定記」〔18〕…伍倫 06

旧蔵者は、徐鴻宝（一八六九?）とみられる。徐（二〇〇七）によれば、浙江省呉興県出身で、挙人となり、北京大学図書館長、京師図書館主

任、図書館師図書幹部主任などを歴任した。

・「南海藏經」〔51〕…WB三二—一三、〔88〕…伍倫20、〔12〕…伍倫27、<sup>147</sup>〔14〕…WB三二—三九

「南海藏經」は康有為の蔵書印とされる。徐〔二〇〇七〕によれば、康有為（一八五八—一九二七）の字は広厦、号は長素、のちに更生とも称した。広東の南海県出身であることから康南海とも呼ばれた。康有為は碑学の大家としても知られ、彼が敦煌文献に関心を示した可能性は高い。<sup>184</sup>は、現物や鮮明な写真は未確認だが、「II」に康有為題字と記録されており、本コレクションと康有為との関係の深さを感じさせる。

以上、印記・揮毫についてみていくと、本コレクションには大陸のみならず日本国内にも流通していた旧蔵者蔵品が相当数含まれていることと、林熊光旧蔵品二件にみられるように浜田が戦後に落手したものが含まれていることがわかる。

## （二）箱書き

次に、前述した川瀬一馬以外に、箱書きとその人物を確認しておきたい。

・「不折審定」〔100〕…伍倫23、「不折」〔120〕…WB三二—四

中村不折（一八六六—一九四三）は、洋画家、書家である。広く書画を集め、とくに中国西域の出土文字資料を蒐集した。<sup>17</sup>書道博物館を設立。現在、台東区のもとで運営されている。二件とも箱書きをした年代は不明である。

・「田山方南」〔32〕…WB三二—一六、〔65〕…WB三二—三三、〔17〕…WB三二—四六

「方南學人」〔162〕…WB三二—二九

田山方南（一九〇三—一九八〇）、本名は田山信郎。一九二九年に文部省宗教局国宝鑑査官補となり、国宝の調査指定に従事し、終戦後は、国立博物館調査課、文化財保護委員会美術工芸課に所属し、古文書・典籍・古写経・墨蹟等書跡関係の指定調査に力をつくした。大東急記念文庫の蒐書にも深く関わった。<sup>18</sup>

WB三二—一六には一九四八年に、WB三二—三三（三四も同じ箱を使用、ただしいずれも箱書きの題名と中身が一致しない）には一九五〇年に箱書きをしている。WB三二—二九では題名と署名を記しているが、箱書きをした年代は不明である。

・「等觀拜書」〔167〕…WB三二—四三、〔168〕…WB三二—四四

多田等觀（一八九〇—一九六七）は、辛亥革命勃発時にチベット入りし、ダライラマに謁見した。チベット仏教を学び、一九二三年に帰国し、東北大学で教鞭を執り、後に財団法人東洋文庫に籍を置いた。箱書きをした年代はいずれも不明である。

・「八郎題」〔18〕…伍倫06、〔39〕…伍倫10、〔44〕…WB三二—一一、〔48〕…伍倫14

尾上柴舟（一八七六—一九五七、本名…尾上八郎）は古筆家で国文学者である。東京女子高等師範学校講師・教授、早稲田大学高等師範部教授などを歴任。書家として帝国芸術院会員となった。書写年は不明である。

このように、浜田旧蔵本には、多数の中国人の旧蔵者の蔵書印が確認できるといって、『国家図書館蔵敦煌遺書』や日本に私蔵されている敦煌文献の多くと似た由来を持ち、その収蔵の経緯には共通性が見いだせる。

このことに関しては、藤枝（一九八五）の「ある敦煌写本頒布会の記録」という一節に紹介された資料が想起される。一九一八年に一六二巻の敦煌

写本を七巻ずつ二三包にわけ、北京の文化界、政界、財界の一流名士に抽選で一包ずつ分配したことを記した資料である。それによれば、その頒布を受けた者にはすでに敦煌文献を多数所蔵していることが知られていた李盛鐸も含まれていたという。一九一三年までに外国の調査隊や北京政府が現地からほぼ持ち去ったか、それなりの場所に所蔵された（または李盛鐸のような個人の手に入った）後にも、このように「敦煌文献が」大量に出回り、李盛鐸さえその購入者となっていたことに對し、藤枝はそれらの出所をおおいに怪しんだのである。しかし、以上みてきた浜田旧蔵本の由来からもうかがえるように、民国期の多数の知識人が敦煌文献等の中国西域出土文献を所蔵していた（しようとしていた）ことは、一九一三年から一九四〇年代の中国における「敦煌文献」への関心とその流通状況と密接な関わりがあると思われる。

### （三） 諸目録

次に諸目録を手がかりに、浜田所蔵品の旧蔵者についてとりあげていきたい。

前掲の東京大蔵会（一九四四）には、浜田徳海蔵品以外に、栗原貞一蔵品（展示品二〇件、展示外品二一件）、山合喜三郎蔵品（展示品三件、展示外品九件）が掲載されている。

そして実はそれぞれの所蔵品のうちの数件の題名と特徴が、浜田旧蔵本、すなわち国会本や伍倫本の数件とほぼ一致する。<sup>19</sup>これによって、浜田がこの展示以降のいつしか栗原旧蔵品や山合旧蔵品を落手したと考えられる。

岩本（二〇一三B）に言及したように、五島美術館の大東急文庫蔵フランク・ホーレー旧蔵敦煌文献のうち『妙法蓮華經』（請求記号一〇七一―一八

―一）は、栗原貞一蔵品（栗31、これは東京大蔵会（一九四四）の栗原蔵品につけられた番号を意味する）に、『大般涅槃經』（二〇七―二三―一）は栗原蔵展示外品（栗外4、これは東京大蔵会（一九四四）のうち展示外の栗原蔵品につけられた番号）に、『大仏頂萬行首楞嚴經』は、栗原旧蔵品（栗44）に特徴が一致する。つまり、栗原貞一蒐集品は昭和一九年の大蔵会後のいつ頃に売却され、一部がホーレーと浜田の手に渡ったのである。この時期について、岩本（二〇一三B）では、ホーレーの蒐集傾向の変遷等から昭和二十一年から昭和二十五年（一九四六―一九五〇）に絞り込んだ。浜田氏が栗原貞一蔵品を入手したのもこの時期とみられる。そしてこの時期は、前掲の反町茂雄の証言とも一致するのである。

以上のようにみると、浜田が終戦後まもなく栗原貞一と山合喜三郎の旧蔵品の一部を入手し、そのコレクションに追加していたことがわかる。

またさほど離れていない時期に、浜田徳海は、銀行家で禅籍の善本蒐集で著名であった石井光雄（積翠軒）が旧蔵していた敦煌写経をもそのコレクションに収めていた。なお石井所蔵の善本書目は川瀬（一九四二）であり、そこに国宝・重文を含む七件の敦煌文献が著録されている。

石井がその膨大な蔵書を売却することになったのは、まさに昭和二三年（一九四八）のことであった。この蔵書処分<sup>20</sup>の顛末についても、反町（一九八七）収録の村口書房の店主、村口四郎との対談でふれられている。そこには、敦煌文献がどこに譲渡されたかは記されていないが、村口書房がその蔵書の処分を任されたことがわかる。

そして、石井の敦煌写経が最終的に浜田に譲渡された時期を推測させる資料がある。それが一九五一年の一月三〇日から二月一日まで大阪の阪急百貨店で催された中国古書展に際し、村口書房が作成した『敦煌出土墨宝

『展覽目録』（村口書房（一九五一））である。そこには二五件の資料名とあわせて、それぞれの特徴が一、二行で記されており、現存品との比較がしやすい。また石井積翠軒旧蔵で知られた国宝の「神会語録」と「歴代法宝記」、重要美術品の「達磨絶観論」も掲載されている。さらに石井積翠軒旧蔵敦煌写経のうち、「神会語録」「歴代法宝記」「達磨絶観論」は、重要文化財収録の図録である毎日新聞社・重要文化財・委員会事務局（一九七七）に、浜田氏の遺族の所有名義と記録されている。ここから推測して、一九五一年のこの展覽目録に掲載された全二五件は浜田コレクションの一部とみることができる。

つまり、『敦煌出土墨宝展覽目録』は、一九五一年に石井積翠軒旧蔵敦煌写経等の譲渡が成約したことを記念し、「浜田徳海蒐集中国古代写本写経・写本・文書コレクション」の逸品二五件を収録したものと推定される。

以上のようにみると、浜田コレクションは一九三九～四〇年頃の北京における敦煌写経を取り巻く環境と第二次世界大戦後の日本における敦煌写経の流通状況とを色濃く反映しているといえる。

## おわりに

以上のように、浜田コレクションは、中国古代史研究に欠かせない西域出土文献の蒐集品というだけでなく、李盛鐸逝去後の一九三〇年代後半から北京などで繰り広げられた「李盛鐸旧蔵敦煌文献」をめぐる「騒動」に由来する品や、戦後日本に市場に出回った敦煌写経を集めた、という特徴をもっている。

李盛鐸が隠遁し、その所蔵していた敦煌文献がごっそりと羽田に譲渡されたはずの後の一九三〇年代後半に、北京在住の安藤徳器はたまたま「李

盛鐸旧蔵敦煌文献」の一部を見ることを得た。しかし、結局は王克敏がそのおおかたを落手した。たまたま一九三九年に大蔵省主税局から興亜院嘱託へと出向した浜田徳海は時に四〇歳、おそらく北京に着任し、運良く敦煌写経を入手する機会を得たと思われる。そして一九四一年には日本に戻り、一九四四年には東洋文庫で開催された第三〇回東京大蔵会でそれら敦煌写経の一部を披露し、一躍、古写経蒐集家や古書肆の注目を集める存在となったのである。

まもなく第二次大戦が終わると、多くの蔵書家がコレクションを手放さざるを得なくなったのとは逆に、浜田はそれらを拾い集めるように蒐集し、ついには国宝指定まで受けた写経をも入手し、コレクションは二〇〇件近い規模に成長するに至った。その蒐集は彼なりの思いや使命感に支えられたものであったとおもわれる。

一九五八年、浜田が逝去すると、コレクションは売却されることとなり、国会図書館が専門家の意見を参考に一部を購入したものの、全部は購入されなかった。井上書店がその他を引き受けた。そしていくらかは国内に購入者がいたものの、一部は長いこと購入者を待ち続け、近年に至って中国の市場を賑わせたということになる。

今回、本書で初公開された目録類で浜田コレクションの全容が把握できることとなった。今後、所在不明の資料への関心が高まることは確実である。さらにはコレクション収集の背景となっていた時代、すなわち近代中国・日本の裕福な知識人が我先に敦煌文献を所蔵しようとした一九一三～一九三〇年代、への関心を深めるきっかけともなる。そして慎重にコレクション一つ一つをみていくことで、北朝隋唐、吐蕃・帰義軍期の敦煌およびその周辺地域の実態等に迫ることも可能になる。



注

- (1) ただし岩本〔二〇一五〕でも記したように、池田温〔一九九〇〕に「敦煌等経文」などが浜田旧蔵敦煌写経として参照されており、池田温〔二〇一三〕に土肥義和氏がこのコレクション内の資料の真贋について意見を述べたとするくだりがあるなど、このコレクションに関する一定の情報共有が、東洋文庫内で行われていた可能性は文面上うかがうことはできたが、今回のような資料の存在が語られたことは一切なかった。
- (2) 一九四一年～四二年の経歴は、『昭和の讀賣新聞』戦前Ⅰ／Ⅱからの検索による。なお、浜田徳海は、一九三六年に設立された大蔵財務協会刊行の機関誌『財政』の初代編集主幹も兼任していた。また、戦後には、衆議院選挙・鹿児島2区に出馬したが、落選したようである。
- (3) JACAR Ref. A04018768700 (アジア歴史資料センター)「大使館参事官浜田徳海大正九年勅令第三百六十七号第一条二依り中華民國国民政府全国経済委員会顧問トシテ中華民國国民政府ノ聘用ニ応スルノ許可ヲ与ヘ並在職者ニ関スル規定適用ノ件」(国立公文書館、昭和二〇年三月六日作成)。なお本書に収めた「Ⅰ 浜田コレクション目録」の序には、浜田が昭和一九～二二年まで中国に滞在して写経を集めたように記されているが、本論で論じたように端緒は昭和一四～一六年に遡るとみられる。
- (4) 東京大学経済学部図書館〔二〇〇〇〕には、浜田の経歴やその文書目録とそれらの梗概が記されている。
- (5) Online Archive of Californiaで含まれる文書の題名までは確認可能である。"Inventory of the Hamada Norimi papers" ([https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c89w0n04/entire\\_text/](https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c89w0n04/entire_text/) 二〇二〇・一・一 確認)
- (6) 陶山〔一九七四〕にも、昭和三十七年三月二五日に「浜田徳海旧蔵の敦煌文書二四点購入」、昭和三十八年三月一六日に「浜田徳海旧蔵の敦煌文書二三点購入」とある。
- (7) 衆議院会議情報第三七回国会議院運営委員会図書館運営小委員会第一号より。国会会議録検索システム (<http://kokai.ndl.go.jp/>) によって内容を確認した。 <https://kokai.ndl.go.jp/minutes/api/v1/detailPDF/img/103704040X00119601213> (二〇一四・一一・二九 確認)
- (8) <https://dl.ndl.go.jp/> (二〇二〇・一・一 確認)
- (9) 「伍倫拍賣推出三十余件南北朝唐人写経」(報道記事) <http://auction.artnon.net/20160819/n859027.html> (二〇一六・一一・一七 確認)
- 王惠民「浜田徳海旧蔵敦煌遺書簡介」(二〇一六・九・二六付、専門家による紹介) <http://public.dha.ac.cn/content.aspx?id=816685432177> (二〇一六・一一・一七 確認)
- 「伍倫二〇一六年秋季文物芸術品拍卖会—浜田徳海旧蔵敦煌遺書専場」(全点写真有り) <https://www.artfoxlive.com/match/2537?index=1&totalElements=36&size=30> (二〇一六・一一・一七 確認)
- 「藝搜」 <http://artso.artnon.net/>
- 簡体字で「敦煌写経」と検索することにより、オークションの個々の成約価格などが閲覧可能。なお上記サイトのいずれもが二〇二〇年一月一日時点でも閲覧可能であった。
- (10) 国会図書館の昭和三十六年度の業務報告である国会図書館〔一九六三 A・三六〕には、購入品として、浜田徳海旧蔵の敦煌文書(二四点)が記載されている。また、昭和三十七年度報告の国会図書館〔一九六三 B・

三六」に、浜田徳海旧蔵の敦煌文書（二三三）が購入品として記載される。またこれらとともに「購入に際しては、専門家を煩わして評価し価格の適正を期した」旨が併記されている。さらに昭和三八年度の業務報告である国会図書館（一九六四・三九）に図書の収書方針の（二）「散佚のおそれある国内重要コレクションの収集整備」として「敦煌文書の第三年次の選択収集をすすめるほか」との記述があるが、同年およびそれ以降の購入品に「敦煌文書」はみられない。この過程は藤枝晃氏の関与や「一度に支払いが出来ないので十年の分割購入となった」状況を裏付けるといえる。

(11) 田中（一九八一・一二六―一二七、一三四）また前掲、岩本（二〇一三B）。

(12) 呉（二〇一六）にしたがい、没年を、一九三七年とする。

(13) 「19」「30」「32」の紀年については、池田（一九九〇）参照。岩本（二〇一三A）では、杏雨書屋蔵敦煌秘笈を中心に、李盛鐸および親族に関わる印記毎に仕分けし、「徳化李氏木齋閣家供養經」「木齋珍藏／唐人秘笈」「木犀藏書」の三種の印の出現は、李盛鐸隠遁後であることなどを示した。

(14) 三井文庫（二〇〇四）。

(15) 外務省情報部編（一九三七）および徐友春（二〇〇七）による。

(16) 鍋島（二〇〇五）。

(17) 鍋島（二〇〇五）。

(18) 物故者記事：東京文化財研究所刊行『日本美術年鑑』<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10240.html>（二〇一〇年一月一日確認）。

(19) 岩本（二〇一五）で詳細な比較をおこなったので、本稿では省略す

る。

#### 引用文献

##### ・日文

ABAJ（二〇一〇）『国際稀覯本フェア…日本の古書・世界の古書二〇一〇年』（販売カタログ）、東京、ABAJ日本古書籍商協会

安藤徳器（一九三九）『敦煌経卷の蒐集』、『茶わん』第九八号、同著『満支雑記』東京、白楊社、三九～四七頁

池田温（一九九〇）『中国古代写本識語集録』、東京、東京大学東洋文化研究所

池田温（二〇一三）『敦煌写本偽造問題管見』、土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』修訂版、東京、東洋文庫、一五四頁

井上書店（一九九五）『人文系古書綜合目録…寺印・官印・蔵印』第五七号（一九九五年夏、古書販売カタログ）

岩本篤志（二〇一三A）『敦煌秘笈所見印記小考』、『内陸アジア言語の研究』第二八号、一二九～一七〇頁

岩本篤志（二〇一三B）『大東急記念文庫蔵敦煌文献来歴小考』、『立正史学』第一一四号、一～二四頁

岩本篤志（二〇一五）『国立国会図書館蔵敦煌文献小考』、『立正大学人文科学研究所年報』第五二号、一九～三五頁

岩本篤志（二〇一八）『浜田徳海旧蔵敦煌文献再考』、『敦煌寫本研究年報』第二二号、一三二～一四六頁

外務省情報部編（一九三七）『現代中華民国満洲帝国人名鑑』、東京、東亜同文会業務部

神塚淑子(二〇一三)『国立国会図書館所蔵の敦煌道教写本』、『名古屋大学文学部研究論集(哲学)』第五九号、五九〇八七頁。同著『道教經典の形成と佛教』、名古屋、名古屋大学出版会、二〇一七年

川瀬一馬編(一九四二)『石井積翠軒文庫善本書目』、東京、石井光雄

国立国会図書館(一九六三A)『国立国会図書館 年報 昭和三十六年度』

国立国会図書館(一九六三B)『国立国会図書館 年報 昭和三十七年度』

国立国会図書館(一九六四)『国立国会図書館 年報 昭和三十八年度』

関口眞大(一九五七)『達磨大師の研究』東京、彰国社

反町茂雄(一九八七)『紙魚の昔がたり 昭和篇』東京、八木書店

高田時雄(二〇〇七)『李滂と白堅』、『敦煌寫本研究年報』創刊号、一〇二

六頁

田中日佐夫(一九八二)『美術品移動史』、東京、日本経済新聞社

土屋紀義(一九九二)『国立国会図書館における漢籍収集の沿革とその構成』、『参考書誌研究』第三九号、一〇一四頁

東京大蔵会(一九四四)『第三十回東京大蔵会展観目録』(昭和一九年一

月一二日、於東洋文庫)

東京大学経済学部図書館(二〇〇〇)『特別資料「濱田徳海資料」目録――

東京大学経済学部図書館所蔵』、東京、東京大学経済学部図書館

陶山国見(一九七四)『蔵書構成の実態調査及びその評価計画について』、

『図書館研究シリーズ』No.一六、東京、国立国会図書館

鍋島稲子(二〇〇五)『不折旧蔵写経類コレクションについて』、『台東区立

書道博物館所蔵 中村不折旧蔵禹域墨書集成』下巻、東京、二玄社、三

五七〇三六七頁

橋川時雄(一九四〇)『中国文化界人物總鑑』、北京、中華法令編印館

藤枝晃(一九八五)『「德化李氏凡將閣珍藏」印について』、京都国立博物館

『学叢』第七号、一五三〇一七三頁

毎日新聞社・重要文化財・委員会事務局(一九七七)、『書跡・典籍・古文

書IV』(重要文化財第二二卷)、東京、毎日新聞社

三井文庫(二〇〇四)『三井文庫別館蔵品図録 敦煌写経――北三井家――』

東京、財団法人三井文庫

村口書房(一九五二)『敦煌出土墨宝展覧目録』、大阪、阪急百貨店

・中文

方広鋸主編(二〇一六)『濱田徳海蒐蔵敦煌遺書』、北京、国家図書館出版

社

林世田・陳紅彦共著(二〇〇七)『敦煌遺書近現代鑑蔵印章輯述』、『文献』

二〇〇七年第二期、(上) 三三〇五二頁、同第三期(下)、一二九〇一四

二頁。再録・林著『敦煌遺書研究論集』北京、中国蔵学出版社、二〇一

〇年、二七二〇三一九頁

榮新江(一九九六)『海外敦煌吐魯番文獻知見録』南昌、江西人民出版社

施萍婷(一九九五)『日本公私収蔵敦煌遺書叙録(三)』、『敦煌研究』一九

九五年第四期、五一〇七〇頁。同著『敦煌習学集』下、蘭州、甘肅民族

出版社、二〇〇四年収載

吳密(二〇一六)『訃聞所見李盛鐸生卒年及其生平事跡』、『図書館研究』二

〇一六年第三期、一二五〇一二八頁

徐友春(二〇〇七)主編『民国人物大辞典』、石家莊、河北人民出版社、九

九〇一〇〇頁

余欣(二〇一二)『許承堯旧蔵敦煌文獻的調査与研究』(『敦煌学・日本学

――石塚晴通教授退職紀念論文集』上海辭書出版社、二〇〇五年、一五

〇（一九二頁、加筆再録「『搜奇癖古入肝膈』——許承堯旧藏敦煌文獻的調查与研究」（同著『博望鳴沙——中古写本研究与現代中国學術史之會通』、第三章、上海、上海古籍出版社、第2章、八一—一二三頁）

※前稿までに多数の方から御指教をいただいたが、本稿の作成や新しい情報追加にあたっては、とくに東洋文庫の速水大氏から多数の御指教をうけた。ここに記して謝辞としたい。